デミタスカップの愉しみ

小さなデミタスカップから感じる歴史とその面白さ

デミタスカップと呼ばれる、濃いコーヒーを飲むためのコーヒーカップ。小さいながらも個性溢れる装飾が目を引き、趣向を凝らしたデザインがあしらわれたカップは、煌びやかでその繊細さに見とれてしまいます。今回は、2000点以上のデミタスカップを所蔵するコレクターの村上和美さんと展覧会の監修を務めた群馬県立近代美術館特別館長の岡部昌幸先生に展示について伺いました。

コールポート
≪メダリオンとジュール金彩カップ&ソーサー≫
（1891−1919年）

デミタスカップ収集家
村上和美さん

本展監修者／帝京大学教授
群馬県立近代美術館特別館長
岡部昌幸先生

—デミタスカップの収集を始めたきっかけは？

村上　子どものころ、母がよくドリップでコーヒーを淹れていました。その時に使っていたのがちょっと小さいカップだったんです。小さい頃からデミタスカップを見ていたので、自分もどんどんその魅力にハマり、気が付いたら2000点以上もコレクションをしていました。

—村上さんのコレクションはどんな点が素晴らしいと思いますか？

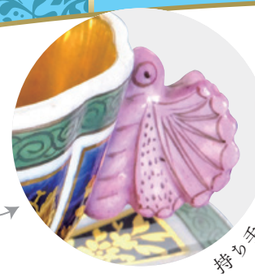
岡部　誰かに紹介されて買うのではなく、自分の目で見て集めてきたと言うところが素晴らしいと思います。デミタスカップはまだまだパイオニアの時代なんですよ。作品は十分古いんだけど、コレクション自体はまだまだ草創期なんです。村上さんは和にも通じていらっしゃっていて、ジャポニスムといわれる日本本来の美しさを意識してコレクションしているのが素晴らしいですね。

—村上さんがカップを集める基準は？

村上　好きか嫌いか直感で選んでいます。敢えて分析すると、手描きの模様や繊細さ、その時代の特徴が表れているかなどを見ていますね。一つひとつの個性を見極めて、自分が面白いと感じられるかが大事なのではないかと思います。また、コレクターには大切に保管する人と私のように使用する人2種類いると思うんですが、集めたカップは実際に使って、飲み口の薄さや飲み心地などを感じています。

サルヴィアーティ（1800年代後期）

スポード≪金彩花卉文蝶ハンドルトロンブローズ形カップ&ソーサー≫（1790-1820年）



Close up
持ち手が蝶に！

錦光山
≪京薩摩金彩龍文カップ&ソーサー≫
（1800年代後期）

そうやって、デミタスの辿って来た歴史を想像するのもアンティーク収集の楽しみです。

—岡部先生が展示するカップの選定基準はありますか？

岡部　どこの窯で作られているか、系譜など、世界各国から集まったデミタスカップの歴史的背景もお見せできればと思い選びました。また、日本の影響を受けて西洋で新たな美術が生まれたジャポニスム（19世紀後半から20世紀前半にかけてヨーロッパで日本の美術品が大変人気になった）など、デミタスカップを通じて学んでもらえればと思います。

—巡回展これまでの反応はいかがでしたか？

村上　清少納言が「何も何も、小さきものは、みなうつくし」と言っているように、とにかく小さい物が可愛いというのが、皆さんの中にあると思うんです。「可愛い」という声がよくあがっていましたし、デザインの種類の多さに驚かれる方もいらっしゃいました。バリエーションが豊かなので、その点でも喜んでくださる方が多かった印象です。

岡部　最初の方の展覧会は、コロナ禍だったこともあり、途中で中止をせざるを得なくなってしまい大変でしたが、そのあとの展覧会は大変好評だったと思います。閉館の時間まで残ってじっくり見ている人が多かったし、学芸員に作ってもらった解説も好評でした。デミタスカップの良さが観客に伝わっていたのがとてもうれしかったですね。

—この展覧会の見どころを教えて下さい。

村上　私が直感と好みで集めたものを美術史の流れに沿って見やすくまとめていただいている点だと思います。

岡部　元々デミタスカップは西洋の文化ですが、その洋物の形態の上に、一生懸命に日本の柄をまねた、ちょっとヘンテコなところに面白さがあると思います。日本と西洋それぞれの美の基準、技術が合わさりこんなきれいな物になるんだと言うジャポニスムを楽しんでいただきたいですね。

—皆さんにメッセージをお願いします。

村上　やっと九州に上陸ということで、私もとても楽しみにしています。デミタスカップはいろんな技術や西洋と日本の文化の融合があってこその作品なのかなという風に思います。そういう点を見ていただきたいですね。

岡部　この展覧会をみることで、美しい器でコーヒーを飲む幸せなどを感じてもらいたいですね。九州には焼き物がたくさんあるけれど、異文化を学ぶことによって何かが刺激となって皆さんの心に残り、喜びと生活を変えていくきっかけになればいいなと思っています。大分県立美術館の大空間に小さい物がいかに輝くかというのも個人的には楽しみです。

マイセン
≪貼り付け花鳥とスノーボール蓋付きカップ&ソーサー≫
（1860−1880年）

アダレイ
≪金彩薔薇図カップ&ソーサー≫
（1886-1905年）

Close up
内側にも綺麗な絵が

DATA　デミタスカップの愉しみ

4/1（土）～5/28（日）

▶大分県立美術館 3階 展示室B

時 10:00～19:00、金・土曜～20:00（入場は閉館の30分前まで）¥ 一般900（700）円、高校・大学生700（500）円
※（　）内は前売および有料入場20名以上の団体料金
問 大分県立美術館 Tel:097-533-4500

The Joy of the Demitasse Cup